

JELA NEWS

ジェラ ニュース 第46号 2018年 8月15日発行 発行責任者 森川博己

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア(祈りのたて琴)／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。 マタイによる福音書25章35～36、40節



9名がカンボジア・ワークキャンプに参加

2年に一度、2月に実施しているカンボジア・ワークキャンプに今年は9名を派遣しました。奉仕活動以外にも、カンボジアの歴史を学び、ひとまわり大きく成長して全員無事に帰国しました。詳しくは2ページ以下をご覧ください。

【この号にはこんな記事が】

カンボジア・ワークキャンプ2018 参加者レポート …… 2～3 難民支援：「難民が希望を持てる社会を目指して」(渡部清花)／ジェラハウス改築費支援のお願い …… 4～5 難民支援：外国人労働者の制度変更で難民保護が変わる？(山本哲史) …… 6 リラ・プレカリア12周年記念イベント報告／ブラジル子ども支援：ペンテコステ礼拝で音楽発表会とファッションショー …… 7 2019年度のインド・ワークキャンプ参加者募集／川柳ひろば入選作発表／支援者一覧／JELA新役員の紹介／読者からの便り／編集余話 …… 8

カンボジア・ワークキャンプ2018 参加者レポート集



JELAは2018年2月14～24日にカンボジアでワークキャンプを行いました。引率2名を含む9名の参加者たちは、JELAの支援で建設されたプレスクール（幼稚園）のトイレ敷設工事その他のボランティア活動を行いました。また、現地の学校の子どもたちと触れ合い、カンボジア・ルーテル教会の青年会や礼拝に参加して交流を深めました。

奉仕活動以外にも、カンボジアの負の歴史と文化を知るためにキリングフィールド、拷問博物館、地雷博物館などを見学したり、世界遺産アンコールワット遺跡の観光も体験することができました。以下に参加者のレポートをご紹介します

（※レポートはJELAによる編集版です。オリジナルはJELAホームページの2～3月のニュースブログ欄から読むことができます。）



内田 奈七(ルーテル田園調布教会)

今回のキャンプは、ボランティアをしたというよりは、させてもらったものだと何度も感じました。技術のいる作業など、自分にできることが少なく迷惑すらかけてしまいましたが、現地の方はみんな温かく教えてくれました。ワークの時間も少なく、自分の無力さを何度も感じました。そんな時、チャプレンの杉本洋一牧師から、子どもたちと遊ぶことやカンボジアのことを知ること自体が奉仕だ、という言葉いただきました。この言葉に支えられ

て10日間めいっぱい子どもたちと遊んで、カンボジアを学ぶことができました。

子どもたちと遊ぶなかで、与えるものより与えられるものの方がはるかに多かったです。純粋できれいな心、当たり前相手のことを大切に思う心、たくさんの心してもらいました。カンボジアの子どもたちは、見たことがないくらいキラキラした顔で笑っていました。大好きなこの笑顔が失われることがないようにという思いを抱くとともに、支援とは何なのかということを考えさせられました。



針田 真由子(ルーテルむさしの教会)

カンボジアから日本に帰り、普段の当たり前前の生活が当たり前ではなかったことを身に染みて実感しました。ゴミのない道路や蛇口から出てくるきれいな水、食べ物に困らない毎日。これらはすべてカンボジアでは当たり前ではありませんでした。今回のキャンプでは、日本で不自由のない生活を送ることができていることに大きな感謝を覚えました。

このキャンプで忘れられない瞬間は、プノンペン教会の最終日に全員で手をつないでお祈りしたことです。日本語から英語、英語からカンボジア語に訳されて三か国語で交わしたお祈りは、世界の平和を感じるお祈りでした。一人ひとりが他

国の人の平和を願う連鎖が続いて、世界の平和へとつながっていくのだと感じました。



森 一樹(ルーテル市ヶ谷教会)

たくさんの「凹み」が与えられたキャンプでした。

最初の滞在地プノンペンでは、激化した内戦の傷跡やたくさんの痛みを目にしました。歴史に残るような大虐殺を行った、ポル・ポト率いるクメールルージュへの強い恐怖感や嫌悪感を覚えたことは言うまでもありませんが、それと同時に、私自身もまた彼らと同じ人間であり、そのような残虐な行為を行い得るということに凹みました。

人からの施しで生計を立てている子どもやハンディキャップのある人々にたくさん出会いましたが、私にはその全員に施しができるほどの経済力や時間もなく、ただ静かに、短く祈ることしかできませんでした。今の自分は不自由で、無力であると感じ、大いに凹みました。

最後の滞在地シェムリアップはアンコールワット遺跡群に最も近い街であることから、観光客向けのお店やレストランがひしめく華やかな街でした。私たちの滞在先も、ハンモックや屋外プールといった設備が充実した、リゾート地を思わせるようなゲストハウスでした。心地よく快適な環境に身を置いていると、悲惨な歴史や自身の無力さにたくさん凹んだにもか

わらず、そんな痛みや凹みを忘れていくような感覚になりました。私たち人間には、辛いことや苦しいことから自分自身を救うシステムの一つとして、物事を忘却できる力が備わっていると私は思います。しかしこの忘却のシステムは時に、忘れてはならない思い出や痛み、そして悔しさまでも忘却させてしまいます。今回はまさにその例であり、そんな自身のどうしようもない忘却にまた凹みました。



安藤 淑子(ルーテル蒲田教会)

JELAのワークキャンプは初参加。カンボジアは初めて訪れる国。しっかりこの国について学ぶと同時に少しでもこの国の人々のお役に立ちたいという動機で参加したワークキャンプ。

幼稚園にトイレを作る作業にほんの少しだけ関わったこと、目がキラキラ輝いているたくさん子どもたちに接することが出来たこと、キャンプ参加者は、70歳代の私以外は高校生と大学生で若い人々のエネルギーをもらったこと、毎夜祈りと分かち合いの時間があつたこと、おいしいカンボジア料理を楽しんだこと、他にもたくさんあるが、どれも貴重な経験になった。このキャンプに参加できたことに心から感謝。



小泉 愛里花(ルーテル・シオン教会柳井チャペル)

現地には学校に通い友達とたくさん遊んだりする子どもたちがいましたが、勉強がしたいのに学校に行けず苦しい思いをしている子どもたちもたくさんいると

いう話を聞き、同じ国の中でも差が激しくまだまだ問題はたくさんあるなど思いました。実際、街を歩いていると物売っていたり直接お金を持っている人にお金をくださいと言ってきたり、一生懸命家の手伝いをして働いている子どもたちをたくさん見てきました。今まで私がどれだけ良い環境で過ごしてきたのか改めて実感することができ、いろいろな事に甘えていたなと反省しました。

今自分にできることは何だろうか、これから私に何かできることはないのだろうか、とたくさん考えました。この思いをいつまでも忘れずに、いつかもう一度カンボジアに行って、少しでも人々が不自由なく暮らせるような手伝いをしたいと思っています。



廣瀬 知登(ルーテル大江教会)

カンボジアは日本より発展してないから、不自由で窮屈な生活をしていると思っていた。しかし、遊んでいるときに子どもたちの笑顔を見ていると、この子たちは希望にあふれていると感じました。大きな勘違いをしていました。与える側だと思い込んでいた私は、子どもたちに対して何も与えられずに、自分がとても無力だと感じました。

同じ年代のクリスチャンの青年と交流を持てたことは、とてもいい経験でした。国も違うし言葉も文化も違うけれど、一緒に交わりの時を持ち祈りの時を持てた



ことで、同じ神様につながっているということ強く感じることができました。

カンボジアで得たものは大きな、大きなものでした。ここで得た経験をこれからどう生かしていくかは自分次第だと思います。この経験をいい思い出でとどめるのではなく、しっかりと生かしていきたいです。



河田 礼生(ルーテル三鷹教会)

子どもたちと遊ぶ機会が多くありました。彼らを取り巻く学校環境は、日本でのそれとは大きく異なります。空調の設備などなく、音楽室などの特別教室もなく、水道水ひとつとってもタンクからの水で私たちに飲むことができないなど、衛生的にもとても良い環境とは言えない所でした。

しかし、そこで私たちと遊んでくれた子どもたちは、とても生き生きしていました。日本で育った私の価値観からはかわいそうに感じてしまいましたが、彼らはとても楽しそうでした。子どもたちと遊んだことで、助けになれなかったと悲観的になってしまっている自分がちっぽけだと感じました。私ひとりの力でカンボジアの子どもたちを助けること(salvation)はできるはずもなく、私が本当にやるべきだったのは、カンボジアの子どもたちのために行動すること(service)だったのだと感じました。

「難民が希望を持てる社会を目指して」

NPO法人WELgee代表・渡部清花さん特別講演会より

3月のJELA社員総会の後、NPO法人WELgee代表の渡部清花(わたなべ・さやか)さんをお招きし、特別講演会を行いました。JELAはWELgeeとさまざまな形で連携し、難民の方々に支援したり難民保護の啓発活動を行っています。

以下は、渡部さん自身による3月の特別講演会の概要です。



このカラフルな画像は、WELgeeのウェブサイトのトップページです。

いま、私たちが一緒に仕事をしているのは、日本に希望をもってやってきた難民の若者たちです。

<私が今の仕事につながるまで>

私の実家は静岡県にあり、自宅で両親はNPOを運営しています。私が中学生の頃に父と母が、学校でも家庭でもない第三の居場所作りの活動を始めました。そこにはいろんな子どもたちがいました。数年間ずっと学校に行っていない男の子、安心して帰れる家がない女の子、繰り返される親の離婚のはざまにいる男の子……そんな同世代の子どもたちと過ごす時間が嫌いではありませんでした。彼らのいい表情が顔を出す瞬間が好きでした。

大学では国際協力・開発を勉強しており、バングラデシュの先住民族の地域にて、NGOの駐在員として活動し、一年後同地域に、国連開発計画のインター

ンという立場で戻りました。日本で二人しか話せない民族語が英語よりも上手になりました。おじいちゃんたちからつないできた命の営みを次の世代につないでゆく——自分が勉強してきた「開発」は、国境を超えて文化を超えた「向こう」側の視点を全く欠いているものだったことに初めて気がついた場所でした。

紛争の爪あとはまだ濃く、日常の裏側にある紛争。何十年も、政府に弾圧され、理不尽な人権侵害にさらされる先住民族を目の前にして、NGOも国連も、ジャーナリストも、人権活動家も答えを持ち合わせていませんでした。政府に守る能力がなかったり、政府自身が虐げている人々に、誰がアプローチできるのだろうかという問いに行き着きました。

その後、「人間の安全保障」を学ぶため、大学院に入学し上京した時の大きな出会いが、日本に逃れてきた難民の若者たちでした。彼らとの出会いは、かわいそう、でもなんでもありませんでした。彼らと作る未来はきっともっと面白いはず。JELAさんとの出会いは、まだWELgeeができてすぐの2016年の春、JELAのウェブサイトの4月22日のニュースブログに私たちの訪問のことを書いてくださったことが懐かしいです。



初めてJELAを訪問した時の渡部さん(左から二人目)と話す森川JELA事務局長(右隣)。

<日本で難民が直面する現状>

「難民」とは、迫害の恐怖をもっており、自分の国に守ってもらえず、故郷を離れざるをえなかった人々のことです。

しかし同時に彼らは、学び、働き、将来、平和になった社会・世界の担い手となる人々です。

政府の難民認定率が群を抜いて低い「難民鎖国ニッポン」にて、多くの能力のある若者たちが、認定をひたすら何年も待ち続け、見通せない将来に不安を抱えながら、社会から孤立し、宙ぶらりん状態の日々を過ごしています。「今日も僕はただ、生きてただけだった」そんなことを未来ある若者に言わせない日常をどう作るかが私たちの最初の模索でした。

<WELgeeの事業>

“自らの境遇に関わらず、ともに未来を築ける社会”をビジョンとするWELgeeには、国籍・人種・宗教等の違いを超え、国際色豊かなメンバーが集っています。団体名はWELCOMEとrefugeeの掛け合わせです。以下にWELgeeの働きをご紹介します。



【Talk WITH～ともに語る～】

WELgeeサロン：毎月40人程が参加する、当事者ととことん語る場。最近ではJELAホールを会場として使わせていただくことも多くなりました。

【Live WITH～ともに暮らす～】

緊急シェルター：いつでも「おかえり」と迎えられるお家
千葉ハウス：近所のつながりの中で作る空き家活用型シェアハウス

【Work WITH～ともに働く～】

キャリアチャンネル：経験、パッション、スキルに基づいた働く機会を



<最後に>

難民当事者の志と、その可能性に気づける日本社会の人が出会うことで、国籍を問わず、意欲ある若者の背中を押せるパラダイムシフト(*考え方の転換)が生まれます。日本は国として財政的にも技術的にも途上国支援、開発援助に関して、非常に大きな貢献をしています。しかし、将来平和になったシリアのために働きたいとか、テクノロジーでアフガニスタンの貧困と格差を解決したいとか、ナイジェリアの教育をもっと良くしたいとか、そう語る難民の若者たちが今ここ日本にいて、彼らの存在に気が付けるかどうかと問われていると思うのです。



これからも”Not talk ABOUT refugees, but talk WITH refugees”(難民に”ついて”話すのではなく、難民”と”話そう)”という、ドイツの団体から教えてもらった姿勢を私たちも意識しつつ歩みます。



ジェラハウス建て替えご支援のお願い

前回のジェラニュースでもお伝えいたしましたように、2棟あるジェラハウスの古い1棟を建て替えることになりました。完成は11月の予定です。ニュースレターやホームページをご覧になった皆様から支援金が届きつつあることを、心から感謝いたします。引き続き、さらなるご支援をいただければ幸いに存じます。

【寄付の方法】

払込取扱票・・・当ニュースレターなどに添付されているJELA所定の払込取扱票をお持ちの方は、ご寄付の目的を記す欄に「ジェラハウス改築」とお書き込みいただき、払込・振替をお願いいたします。

それ以外の用紙をご利用の場合は、通信欄に「ジェラハウス改築」とお書き添えください。払込・振替先は以下です。

番号 : 00140-0-669206
加入者名: 日本福音ルーテル社団

クレジットカード・・・Visa, MasterCard, JCB, American Express, Diners Clubのいずれかのクレジットカードをお持ちの方は、JELAウェブサイト(www.jela.or.jp)からご寄付いただけます。お支払いの際は、「寄付の種類」を選ぶ項目で「ジェラハウス改築支援」を選択してください。

銀行振込・・・振込依頼人の名義を「カイチク+ご氏名」とし、以下の口座にお振込ください。

横浜銀行 恵比寿支店(店番907)
普通口座 番号6002037
名義: 一般社団法人日本福音ルーテル社団

ご支援のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。



建築予定のジェラハウス側面図



現在のジェラハウス

政治経済的視点を踏まえた難民保護
第9回
外国人労働者の制度変更で
難民保護が変わる？

神奈川大学法学研究所 客員研究員
山本 哲史



この連載では、人々が難民保護のための法を守るように仕向けるための工夫について考えています。前回のコラム（第8回）では、難民認定審査の面倒さから逃れようと、申請者を減らそうとしている（遠ざけようとしている）国はあるけれども、その効果に科学的根拠はない（たとえば審査を厳しくしても申請者が減るわけではない）とする研究があることなどを書きました。今回は、つい先日発表されたタイムリーな話題です。

■外国人受け入れの基本的考え方

先日、政府によって今の私たちだけでなく、将来の世代にとっても非常に重要な決定が行われたことをご存知でしょうか。私たちの仕事や生活環境と、外国人との関わりについてのとても重要な話です。経済財政諮問会議という安倍首相が主催する会議の中でのことです。

要するに、これまで日本は労働に従事する外国人の滞在を例外的にしか認めなかったのですが、その枠を来年から広げます、という内容です。医療や農業、建設などの分野で、最長で5年間の滞在資格が新設され、2025年までに延べ50万人の外国人労働者を日本に呼び込もうというものです。なにやら難民保護に有益な、歓迎すべき決定のように見えます。

一般的な話をすると、外国人の滞在を制限的にしか認めない、というのは、日本に限ったことではありません。滞在の形態として、それが長期的かつ安定的な滞在となり、場合によっては帰化したりしてその国の国民になる、つまり市民権を獲得して根付いてゆくというような場合、それを移民と呼ぶわけですが、日本は移民ではないと一般的には理解されています。言うまでもなく、米国やカナダ、オーストラリア

などに代表される諸国は、大航海時代まで遡る悲しい歴史のなかで、その結果として移民国として確立し、しかし近年では新たな移民に対して制限的な考え方が示されるようにさえなっています。一言でいうと、今の時代、移民は難しいのです。

このことは逆に、すでに住んでいる人々が、非常に有利な立場にあるということ、それが無条件に得ている特権である、ということの意味していますね。日本の構成メンバーは日本人です。憲法にも、日本国籍を有しているかどうか、これは法律で定め、と書いてあって、国籍法を見ると、日本人というのは基本的に日本人の親から生まれた子ということになっている。生まれながらにして、日本では日本人が特権を持っている。これはその人の出身や家族などによる差別があってはならない、とする近代人権思想とは一見すると相容れないようにも思えます。

しかし当然ながら、これは日本で日本人が特権を有しているというだけの話でして、同じことは米国で米国人が有しているということになり、結局その意味では平等は確保されているという建て付けになっていることも理解しておく必要がありますね。そこに外国人が入ってくる。誰を入れるか。どのような条件を付すか。こうしたことを入管政策と言って、基本的にその内容はその国の国民が絶対的な決定権を持って決めることをこの世界は認め合っているのです。

■物事を決定する際に求められること

では、日本の入管政策はどうなっているか。これについて「専門家」や「研究者」などの肩書きであれこれ書いたり話したりしている方々がいらっしゃるけれども、大事なことは、みなさん一人ひとりが考え、決めるべきことである、ということなんです。一方で、たとえば企業などは、「安くて質のいい働き手が欲しい」となりますよね。「日本人の働き手が減っている。ならば外国人を呼び込もう。とはいえ日本人の財産や仕事を奪うようなことになってはいけないう」というような話が出てきて、それについて「専門家」や「研究者」が知ったげに語り出す。

今回の諮問会議の決定は、まず「諮問」というのは専門家の意見を聞く、というような意味ですから、専門家の意見を踏まえて、安倍首相は政策の参考にして、重要事

項はその正規のメンバーと話し合っ決めてみましょう、というわけです。さて、「専門家」は誰の目線で、何を語ったのでしょうか。気になりませんか？ ところがマスコミはといえば、「日本はいよいよ移民国になるかもね」とか「移民国になるわけじゃない」とか、そんな話ばかりでしたね。

本当に知りたいことは、因果関係。いくつかのシナリオの中で、今、これこれこういう政策を実施したら（原因）、将来、こういうことが起きるよ（結果）という、原因と結果を結ぶ因果関係について、科学的な説明が欲しいと私は思います。世間話程度のことはどこでもやっていますから、わざわざ新聞だのニュースだの記事にしてもらわなくてもいいですね。今回の決定が、難民保護をどう変える可能性を秘めているのか。このことについても、やはり、科学的な根拠に基づく因果関係が知りたい。次回（最終回）はその辺を考えたいと思います。

……………

本連載記事バックナンバーのご紹介

3年間にわたって連載してまいりました「政治経済的視点を踏まえた難民保護」が次回で完結するにあたり、これまでの記事のタイトルと、それを載せている『ジュラニュース』の号数・発行日を以下に示します。まとめてお読みになれば、本連載の意図がよりよく理解できるのではないかと存じます。

- 序章：難民問題への政治経済的側面からのアプローチ 第37号(2015年8月15日発行)
- ※JELAを会場に行われた「難民保護の勉強会」(主催：社会福祉法人日本国際社会事業団)のレポートです。
- 第一回：政治経済的視点を踏まえて難民保護を考える 第38号(2015年12月15日発行)
- 第二回：法にも得手不得手がある 第39号(2016年4月15日発行)
- 第三回：ドイツの実践から(1) 第40号(2016年8月15日発行)
- 第四回：ドイツの実践から(2) 第41号(2016年12月15日発行)
- 第五回：難民条約と入国管理 第42号(2017年4月15日発行)
- 第六回：移動という視点で見た難民 第43号(2017年8月15日発行)
- 第七回：武装難民が来たら射殺する？ 第44号(2017年12月15日発行)
- 第八回：難民認定審査が甘いとうなる？ 第45号(2018年4月15日発行)

「JELA NEWS」バックナンバーは、JELAのホームページでご覧いただけます。



左記のQRコードからも簡単にアクセスできます。印刷したものをご希望の場合は、送付先をご連絡いただくと、該当箇所のコピーを郵送いたします。

大盛況のリラ・プレカリア
12周年記念イベント
～新たな出発を誓う

リラ・プレカリア研修講座の修了生がイベント実行委員会を立ち上げ、5月18・19日の二日間、「音楽から沈黙へ」と題するリラ・プレカリア創立12周年記念講演会・コンサートをJELA ミッションセンターホールで開きました。



ゲストとして招かれたのは、オーストラリアで活躍されている認定音楽死生学士のピーター・ロバーツ氏（ハーピスト）。会場は両日とも満席で、二日間で延べ280人以上の人々がホールを埋め尽くしました。

ブラジル子ども支援
ペンテコステ礼拝で音楽発表会と
ファッションショー

JELA が支援をしているブラジルの音楽ミニストリーに関する報告を徳弘浩隆牧師（JELC ブラジル派遣宣教師・サンパウロ教会牧師）にお寄せいただきましたので、ご紹介します。（JELA 事務局が原文の一部を抜粋し編集しました）

5月20日は教会のペンテコステ（聖霊降臨祭）礼拝。この日は、毎年サンパウロ教会とジアデマ集会のメンバーと一緒に集まって礼拝をします。

去年の2月から急に増えたジアデマの音楽教室の子どもたちも、今年なら連れて



ロバーツ氏は音楽死生学の分野でキャロル・サック宣教師（リラ・プレカリア創始者）の先輩です。キャロル宣教師も学んだ米国の学院での研修を終えた後は、オーストラリアで音楽死生学士として先駆的な働きをしてこられました。ロバーツ氏の生き方と活動に焦点をあてたドキュメンタリー映画が作られるなど、オーストラリアで用いられている方です。講演会では、自身のオーストラリアでの活動や家族のことについてユーモ



いけると思い誘いました。「サンパウロにバスで行くの？」と子どもたちが興奮気味に聞いてきます。

「そうだよ。向こうの教会のみんなと一緒に礼拝するんだ。音楽の発表会もちょっとあるよ」と言うと、大喜び。音楽教室の最中に家に戻って保護者のサインをもらってくる子や、「弟も連れて行っていいってお母さんが言うから、申込書もつちようだい!」と走って戻ってくる子もいました。

「遠足」に行く子どもたちは15人ほど。ジアデマの教会メンバーも入れると20人少しになりました。マイクロバスを借りて、教会メンバーの車と一緒にサンパウロに行きました。

礼拝では、この3月まで日本で研修を受けていたメロ先生が日本語とポルトガル語で説教をしました。サンパウロ教会の聖歌隊、音楽教室の大人の生徒のリコーダー演奏、礼拝後に大人と子どもの生徒のピアノ発表もありました。サンパウロの音楽教室の子たちもピアノを弾いてくれましたが、日系人、ブラジル人、ブラジル移民の中国人のお子さんもいて、まさに各国語が飛び交うペンテコステで

アも交えながら紹介し、途中途中にハーブの生演奏も聴かせてくださいました。

19日午後には、リラ・プレカリア創立12周年記念パーティがあり、修了生らは親交を深めつつ、新たな出発を誓い合いました。

リラ・プレカリアはこれからも、修了生を中心としたパストラル・ハーブの活動が継続される予定です。皆様お祈りとお支えをよろしくお願いたします。



した。昼食後は「日本体験ファッションショー」をしました。「着物、浴衣コーナー」を二階に作り、子どもたちを連れて行きました。初めて見る日本の着物。照れながら、楽しそうに着てみえています。それなりに簡単に帯を結んであげて、みんながデザートを食べている中庭への階段を下りて、ファッションショーです。教会メンバーも大喜び。私も盛り上げなければと奮起して、男性が着てもいいような着物（ほとんどは女性用だったらしいですが）に帯をして、木刀を腰に差してみると、みんな大喜びです。

帰り際には、「よく来たね。音楽教室も頑張ってた来てね」とサンパウロの大人たちに言われ、子どもたちはバスに乗ってジアデマに帰っていきました。とても楽しい「遠足」でした。音楽教室の子どもたちは、このように少しずつ成長しています。今後ともご支援、お祈りを願いたします。



JELA 新役員のご紹介

3月27日のJELA年次社員総会で、役員
の改選がありました。2020年3月の社員総
会までのJELA役員は以下の通りです。

理事長 森下博司

(社会福祉法人東京老人ホーム 評議員)

常務理事 長尾博吉

(公益財団法人日本宗教連盟 評議員)

常務理事 古屋四朗

(学校法人草苑学園 総務・財務部長)

理事

松岡俊一郎(日本福音ルーテル大岡山教会
牧師)

森川博己(日本福音ルーテル社団 事務局長)

浅野直樹(日本福音ルーテル市ヶ谷教会牧師)

杉本洋一(日本福音ルーテル熊本教会 牧師)

中川浩之

(元東急エージェンシーインターナショナル
取締役)

明比輝代彦(日本福音ルーテル教会引退牧師)

以上、理事9名

監事 安藤淑子(元 WHO 財務担当)

監事 木村 猛(株式会社ザ・ルーテル取締役)

以上、監事2名

インド・ワークキャンプ2019 近日参加者を募集します!

期間:2019年2月9日(土)~19日(火)

※2月に実施しますが、期間は変更の
可能性があります。

対象:18歳以上の健康な方(高校生不可)

定員:10名前後(人数調整のため書類
選考があります)

* 詳しい募集記事は9月頃にJELAの
ホームページに掲載予定。郵便での連絡
をご希望の場合は、その旨と郵送先を
JELAまでご連絡ください。

川柳ひろばだより

第12回川柳ひろば入選句発表!

次の三句が選ばれました(柏木哲夫・
選)。速水さんは今回が初めての入選で
す。おめでとうございます。なかなか情緒
のある作品です。とんちゃんも相変わらず
頑張っています。

<最優秀句>

・夜桜の月を枕に寝てみたい(速水正仁)

<優秀句>

・析ノ心勝って教えた出身地(とんちゃん)
・鯉のぼりビルの谷間じゃ深海魚(うなたる
う)

以下のような佳作もありました(川柳ひろば
管理人・選.柳名略)

- ・通院がいつの間にか散歩道
- ・「ウソをつけ!」つけばついでで叱られて
- ・ニュース見る見たくない顔今日も見る
- ・過ぎ越しや稲荷神社の紅き門
- ・儲ければ何か大事な損してる
- ・ストレスを全部取ったらストレスに
- ・不便さの底に豊かさ見え隠れ
- ・逝くときは言ってみたいなアイルビーバック
- ・議員数足りて足りないその資質

作品は随時募集しています。このページ右
下のJELA事務局までご投句ください。最近
の入選作を見ていると、まとめて送ってくだ
さった場合に、入選確率が高くなるようです。
一句ずつではなく、一度に十句から数十句
作ってお送りくださることをお勧めします。
(川柳ひろば管理人・森川博己)

読者からの便り

払込取扱票の通信欄に書いてあるメッ
セージや、事務所に届いたお便りの最近
のものを以下にご紹介します。

- ♥ 変わらず よろ々々ですが本を読み元
気です。
- ♥ お働きに感謝しております。
- ♥ 編集余話に「君たちはどう生きるか」
のことが書かれていました。私も中学時
代、読みました。
- ♥ リラ・プレカリアの働きがたくさんの
人々の助けとなることを祈っています。
期待しています。
- ♥ リラ・プレカリアの体験を思い出し、
関係者の皆様の大変な奉仕活動に、改
めて深い感謝を献げます。
- ♥ サンパウロ教会の音楽活動のため
- ♥ わずかですが、お働きに御使い下さ
い。
- ♥ 皆様のお働きが主によって祝福され
ますように。
- ♥ お働きが祝福されますように。

支援者一覧

(2018年2月1日~5月31日)

浅野信子/安藤淑子/池田哲也/ウエスト東京ユニオン・
チャーチ/江澤妙子/大塚真佐子/大嶺愛持・裸覇武・十
六夜/金子佐年/京谷信代/金銀淑/久保陸郎/小泉小枝/
小島拓人/古庄理世/小松由美/酒井恵美子/佐野友美/
杉浦りえ/聖望学園高等学校/高橋ふく子/高橋悠美子/
高橋要子/武井順太郎/田中寿夫/中嶋裕一/中山麻由/西
千恵/西垣親子/西立野園子/原口恵子/春木イツ子/
ビューレットえり子/福地明子/古川文江/保坂和子/松本
幸恵/南節子/牟田青子/森保宏/森涼子/森若奈/森田雅
子/安みぎわ/山県順子/山口敏子/山本了/弓削萬里/横
山恭子/リラ・プレカリアイベント実行委員会/若原奇美
子/JELC玉名教会

以上、順不同・敬称略。ご支援ありがとうございます。
匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせくださ
い。

JELAの活動にご支援を!
各種献金のご送金は下記をご利用ください。



ホームページからクレジットカードで寄付ができます!

編集余話

「駅ピアノ」というTV番組を見ました。アムステ
ルダム中央駅の構内広場にピアノが置いてあり、
そこを歩き来たる人が自由に弾いてみるという
趣向です。移民・難民に手厚い国らしく、いろ
んな民族の住民が、入れ替わり立ち代り登場し
ます。朝の職場に向かう途中、仕事の帰り、孫との散
歩のついで、週末の暇な時間……に街に住む市
民が、あるいは「私を弾いて」という表示を見た旅
行者が椅子に腰かけ鍵盤に手を置きます。そし
ておもむろに、十八番の曲・幼少時に本国で耳
にした曲・自分で作った曲などを奏します。音楽に託す思いや、曲にまつわるエピソードも披露され、視聴者の興味を広げます。
見ていて定年後の夢がふくらみました。「ムーン・
リバー」をエレクトーンで、「お嫁においで」をウク
レシで弾けるようになりたい。(ひろみん)

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523
Email: jela@jela.or.jp
HP: http://www.jela.or.jp
郵便振替口座番号: 00140-0-669206
加入者名: 一般社団法人日本福音ルーテル社団